



統合失調症を患う母とともに生きる子ども ～ゆりの日常～

プリンセス —17歳からはじまる—



松岡園子

1997年秋。

赤や黄色の葉が舞う道を、ゆりはゆっくりと歩いていた。右手には茶封筒。中にしまわれている一枚の紙切れが、ゆりの1年間を物語っている。

「日商簿記検定 合格通知」

2週間前、職員室前のことだった。簿記担任の佐藤先生がゆりの顔を見るなり駆け寄ってきた。

「合格や！ 2級！」

「……やった！」

小さな歓声とともに他の先生や友人たちが集まってくる。

「おめでとう！」

「よかったです！」

周囲の祝福より、まずはほっとした。これで夏子を心配させずに済む。でも本当の勝負はこれからだ。

夜の授業を終えた後、高校の職員室に寄ったゆりの背中を、懐かしい声が包んだ。

「わあ、ゆりちゃん！ 卒業以来やね」

「……智恵ちゃん！ 久しぶり！ 大学の帰り？ 髮形が変わってて一瞬、誰かわからんかった」

茶色に染まった髪のせいか、すごくお姉さんに見える。

「大学の授業って朝から夕方まであるねん。高校の時は夜だけやったやん。それにサークルにも入ったから…大学生って結構、忙しいで」

「わ、すごい！」

大学生…智恵美の話している内容も、ぐんとお姉さんの会話のように感じる。

「でも……奨学金借りて、やっとかな。両親からは『働け』って言われてるし」

「じゃあ、私も頑張らんとな。私は定時制と通信制を両方取ってて、3年で卒業する予定やから来年、卒業」

ゆりは脇に抱えた参考書をパラパラとめくりながら答えた。先週、先生と進路の話をしていた時に、夜間大学に行かないかと勧められた。簿記の資格を取ることができたゆりは推薦枠を利用して受験できるということだった。

家に帰ると夏子が笑顔で迎えた。数か月前に再び症状が出た時は心配だったが、今は以前よりも安定していた。

「今日もちょっと早めやねえ」

「うん、今、お母ちゃんの好きなポトフ作ろかな。明日、食べて」

台所で野菜を刻みながら話を続けた。

「あのね、私……大学受けようと思ってる」

夏子の手が止まった。

「大学生？ ゆりが？」

「うん。夜間の大学やけど。働いて勉強して、将来ちゃんとしたい」

夏子は少し黙ったまま、少し笑っているように見える。

「行けたらいいね」

◇◇

翌春、ゆりは高校の指定校推薦で国立の夜間大学の経営学部に入学できた。家庭に事情のある学生は基準以上の成績を収めることが条件になるが、授業料が減免される制度もあるとのことだった。

入学式の朝、夏子は淡い黄色のワンピース姿で玄関まで見送りに来た。この花柄のワンピースは、久しぶりに見る夏子のお気に入りだった。

「お姫様みたいや」

自然と口に出てしまった。

「ええ？」

「いや……その服、よく似合ってるよ。行ってくる」

「がんばってね」

電車の中でゆりは夏子を思い浮かべた。お姫様は、今も昔も、そしてこれからも夏子らしい存在だと思う。

◇◇

夜間大学での最初の学期が終わりに近づいている初夏。ゆりは昼間、宅配会社の事務作業やコンビニでのアルバイトをしながら大学に通った。休憩時間に大学の課題に追われて

いることも度々。

「吉田さん、これお願ひ」

「はい！」

顔も見ずに返事だけすると、店長が笑っていた。

「大学生って大変やね」

「はい……でも楽しいですよ」

「そうか。勉強しながら働くのって大変やね」

「ありがとうございます」

ゆりはにっこりと微笑んだ。帰りの電車の中でふと考へる。私が大学に行くなんて、考へてもみなかつた。自分には縁遠いと思っていたことが現実になつてゐる。でもまだ先は長い。あと3年半の大学生活。その後は就職もある。「もっと稼げるようになせな」という思いで大学の授業で指定された本を読み込む日々だ。

家に帰ると、夏子が台所に立つてゐた。

「お帰り」

「ただいま。今日は私がご飯作るよ」

「大丈夫よ、私が……」

「いいから」

夏子は少し寂しそうに台所から退いた。それでも文句ひとつ言わない姿が、今の夏子だった。

「お母ちゃん、最近の調子はどう？」

夕食の席で、ゆりが尋ねた。

「うん……最近は頭の中の声も減ってきたわ」

「そうか……良かった」

「ねえゆり」

「うん？」

「あのね……私ね……ゆりが大学行ってくれて嬉しかったよ」

「そう」

「うん……でもね、実は少し怖いの」

「何が？」

「ゆりが大人になっていくのが」

夏子の言葉に胸が締め付けられる。

「別に、どこにも行かへんで。一緒におるやん」

「ありがとうございます」

その夜、ゆりはベッドの中で過去を振り返つた。幼い頃は夏子が全てだった。夏子が英語教室を開いていた頃は華やかに見えた。でもその裏には苦勞もあった。夏子は時々情緒不安定になり、家にこもることが増えた。そして中学生の頃に始つた症状……。夏子はほとん

ど家事をしてくれなくなった。それでも「お姫様」と呼ぶべき存在であることに変わりはなかった。

翌朝。

「行ってくるね」

「気をつけて」

玄関まで出てきた夏子に手を振る。昨日の夜、考えていた昔の夏子のことを思うと、見送ってくれるだけでも奇跡のように感じる。この春から始まった新しい生活。夜間大学の講義とバイトの掛け持ち。でも不思議と苦にならない。大学のキャンパスにはさまざまな年代の学生がいる。社会人入学の人も多く、みんな必死だ。

◇◇

時間が流れるのは早かった。ゆりは大学3年生になった。授業料減免制度のおかげで経済的にも安定してきた。

ある日、夏子が突然言い出した。

「私、英語教えたい」

「え？」

「ちょっとだけ、週2日くらいで……小さい子どもたち相手に」

驚いたが同時に嬉しかった。

「いいんちゃう？」

「でもね、また調子悪くなるかも」

「無理せん程度にやつたらええやん」

ゆりの言葉に夏子は涙ぐんだ。

週末、夏子の英語塾が自宅の1室で始まった。5人の小学生を集めて英語を教えるスタイルだ。生徒たちと接している夏子は楽しそうだった。

ゆりも「最初だけ……」と、一緒に補助の先生役をしてみることにした。

「お母ちゃんの仕事姿見るの、初めてかもしけん」

皆が帰った後、ゆりは机を乾拭きしながら夏子に言った。

「そっか……いつも教室の中には入れなかつたもんね」

「うん。でも無理せんとつてな」

「ありがと」

◇◇

夏の暑い夜。バイト帰りに自販機の前で立ち止まつた。コインを入れようとするとき、後ろ

から声がかかった。

「ゆりちゃん？」

振り向くと大学で同じ授業を取ったことのある山本さんが立っていた。

「あれ？ なんでここに？」

「私の家、この辺やねん」

笑顔が爽やかだ。

「そっか……バイト帰り？」

「うん。これからコンビニで夜勤」

「私もコンビニバイトしてる、夜勤って、頑張ってるなあ」

ゆりは山本さんと並んで缶ジュースを開けた。

「なあ、夏休みはどうするん？」

「就活の準備かな……でもバイトもあるし」

「そうか……私は地元に帰る予定」

「京都やった？」

「うん。ゆりちゃんは？」

「実家……まあ特には予定ないけど」

しばらく黙って二人で空を見上げた。

「ゆりちゃんてさ……将来の夢とかあるの？」

「うん。まだぼんやりしてるけど……会計の仕事に興味ある」

「へえ、すごいね」

「山本さんは？」

「私はマーケティング……かな」

「そっか。お互いがんばろ」

「うん」

山本さんと駅前で別れた。

◇◇

2003年3月。

大学卒業式。

まだ冷たい風が吹き抜けるキャンパスで、卒業証書を受け取ったゆり。この4年間はあつという間だった。働きながら学ぶという、楽ではない道を選んだが、そのおかげで多くの価値観を得ることができた。

式典後、校門の前で記念写真を撮っていたとき、遠くから夏子が走ってくるのが見えた。

白いカーディガンと淡いブルーのスカートという出で立ちはまるでお姫様のようだった。

「ゆり！ 卒業おめでとう！」

息を切らしながら駆け寄る夏子。その姿を見て思わず笑ってしまう。

「お母ちゃん、そんな急いで来なくてええのに」

「だって大切な日やから……」

周りにいた同級生も拍手してくれた。

帰り道、母娘は肩を並べて歩いた。川沿いの桜並木はまだ蕾だったが、暖かさを帯びた風が頬を撫でる。

「ゆりちゃん」

「うん？」

「ありがとうね」

「何が？」

「こうして……ここまでやって来てくれて」

「当たり前やん。私のお姫様やもん」

冗談めかして言うと、夏子は照れたように笑った。

◇◇

ゆりは就職活動の結果、市役所の事務職に採用された。配属先は数字を扱う給与部門だった。就職が決まったとき、夏子も大喜びした。

「よかった……本当によかった……」

その言葉に込められた重みをゆりは理解していた。夏子にとって娘の就職は単なる職業決定以上の意味を持つのだろう。

しかし喜びも束の間、4月になると夏子の調子が再び崩れ始めた。朝起きられなくなり、幻聴がひどくなったという。

「今日も英語塾は休んだ」

台所で一人コーヒーを飲んでいるゆりに、夏子が消え入りそうな声で告げた。

「そうか……ゆっくり休んでな」

「……うん」

ゆりはため息をつきつつも、「また同じ展開か」と冷静に考える自分に気づいた。一旦始めた仕事も、病気のためにダメになる。過去にはこの繰り返しに翻弄されていたが、今は違う。医師ともしっかり連絡を取り合い、状況によっては精神科に同行することもある。そんなことが続いていたある夜、ゆりが仕事から帰ると夏子は布団の上で膝を抱えて座っていた。

「お帰り」

「ただいま。晩御飯、食べた？」

「うん……ゼリーだけ」

「ちゃんと食べなあかんよ」

「わかってる……」
その声は震えていた。
「ねえお母ちゃん」
「うん？」
「私な……」
ゆりは少し躊躇った後に続けた。
「実は昨日、2階で机の整理してたらさ、私が3歳ぐらいの時にお母ちゃんが教室やってた時代の記録を見つけたんよ」
「え？」
「あの頃の資料って、結構残ってるみたいで……」
「……そうなんや」
「私な……お母ちゃんがあの頃、頑張ってたことを忘れてないよ」
「……」
「だから……また教室ができるといいなって思う。今度は私も手伝うから」
夏子の目から涙が零れ落ちた。
「ありがとう……ゆりちゃん……」
「お姫様も復活せんとな」
軽口を叩いてみると、夏子は小さく笑った。

◇◇

季節は巡り、秋を迎えていた。ゆりは市役所での仕事に慣れ始めていた。午後5時の閉庁まで集中して業務を行い、その後は図書館や自習スペースで勉強をする日々。ある土曜日、昼下がりに夏子が珍しく外出すると言って支度をしだした。

「ちょっと出かけてくる」
「一人で大丈夫？」
「うん……近くやから」
夏子は、薄い緑色のワンピースを着ていた。かつての「お姫様」スタイル。
一家に帰ってきた夏子はテーブルの上に封筒を置いた。
「これは？」
「英会話教室の求人票」
「え！？お母ちゃんが！？」
「うん……パートで週3日から。子どもの英会話教室なんやって」
「無理せんとってな」
「大丈夫。少しずつなら……それに……」
「それに？」

「ゆりちゃんが手伝ってくれるって言ってたやん？」

「ああ……確かに言ったけど」

「やから……頑張る」

決意に満ちた表情だ。

その夜、ゆりは机に向かいながら母の勇気に感動していた。自分の母親としてではなく、「一人の人間」として尊敬の念が湧いてきた。同時に、ゆり自身の心にも変化があった。「早く社会的地位を確立しなければ」という焦燥感は薄らいでいた。

母が病気を抱えていても、再び前に進もうとしている姿を見ることで、ゆり自身も焦らずゆっくり成長すれば良いと思えるようになった気がした。

◇◇

冬休みに入ったある日曜日。夏子の元に連絡が入った。英会話教室の面接を通ったとのこと。

「来週から行くことになった」

「ほんま！？」

「うん。先生が私の病気のことも知ってて、無理せず少しずつやっていくつもり」

「よかったなあ……」

ゆりは胸が熱くなった。夏子が自信を取り戻しているように見えた。その日から夏子の様子が変わった。毎朝早く起きて身支度を整え、出かけるときには必ず淡い色のワンピースを着るようになった。まるで本当に「お姫様」のようだ。

「ねえお母ちゃん」

「なに？」

「やっぱりお母ちゃんは素敵やな」

「……恥ずかしいわ」

照れながらも嬉しそうな夏子の姿を見て、ゆりは安堵した。

◇◇

2004年初夏。

ゆりは23歳になっていた。就職してから1年。安定した収入と同時に、将来に関して夏子のサポートができればと考え続けていた。ある夜、ゆりは夏子と台所でアイスクリームを食べていた。

「ねえお母ちゃん」

「うん？」

「私な……考えたんやけど」

「なに？」
「将来的には、お母ちゃんと英語塾と一緒にできたらええなって」
「……ゆりちゃん」
「私な……簿記の知識もあるし、お母ちゃんの教室を経営面からサポートできると思うねん」
「でも……そんな簡単に……」
「簡単じゃないのは分かってる。でも可能性はあるやんな？」
夏子は目を丸くしてから笑った。
「ゆりちゃん……本気で言ってる？」
「うん。だから……待ってて」
「待ってるって……？」
「私な……まず子どもへの勉強の教え方を学ぶ。苦手な数学も勉強し直す」
「ええっ！？」
「そしたら……一緒にやりたい」
その瞬間、夏子の目から涙があふれ出した。泣きながら笑っている。
「ありがとう……ゆりちゃん」
「お礼なんてまだ早いわ。これからやから」
「うん……うん」
「私たち……一緒に何かを始められるね」
窓の外では梅雨明けを告げる青空が広がっていた。ゆりは机の引き出しを開け、中学数学の参考書を手に取った。

エピローグ

2008年春。
ゆりの家の門に、「プリンセス英会話スクール」と書かれた看板が掲げられていた。
ピンク色のワンピースを着た女性が入口に立っている。夏子だ。
ドアを開けて入ってくるのは数人の子どもたち。彼らを迎える夏子の表情は生き生きとしている。
「今日も頑張ろうな」
「うん」
4ヶ月間の準備期間を経て、ついに教室がオープンした。夏子が英語を教える一方で、ゆりは英語以外の教科と経理を担当する。扉が開く音と共に新たな生徒が入ってきた。
「こんにちは。体験レッスンですか？」
夏子の笑顔が輝く。

ゆりは母を見つめながら思った。

(私の「お姫様」は、本当に美しい)

ホワイトボードの前に立つ母の手には、赤と黒のマーカーがある。それを持って教壇に立つ姿こそが、最も輝いていると感じた。

ふたりの新たな挑戦が始まっていた。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。